

源流の四季

第12号(2004年1月) 冬



Winter

発行所/多摩川源流研究所 〒408-0211 山梨県北都留郡小菅村4383
TEL 0428(87)7055 FAX 0428(87)7057

発行責任者/中村文明

協力/多摩川源流協議会(塩山市・奥多摩町・丹波山村・小菅村)
多摩川源流観察会

印刷/(株)サンニ子印刷

<http://www.tamagawagenryu.net>

E-mail:genryu@mx4.ccsmo.ne.jp



鉦走の一ノ瀬川末谷(撮影 中村文明)

Contents 目次

- 「新春さわやか対談」特集.....2~5
- 源流の魅力と価値を全国に広めよう.....6
- 多摩川源流自然再生協議会設立へ.....7
- 大きな反響を呼んだ「森林再生プロジェクト」事業.....8
- 参加者のアンケートを紹介.....9
- 紅葉の水源林と味覚を満喫.....10
- 竜喰谷との感動的な出会い.....11
- 平成16年度イベント紹介.....12

「新春さわやか対談」

対談者 狛江市市長 矢野ゆたか
源流研究所長 中村文明

源流に今、新しい風が吹き始めています。源流域の垣山市、奥多摩町、丹波山村、小菅村の4市町村が、一昨年、多摩川源流協議会を結成し、源流域の自然環境の保全と活性化を目指して、協調体制の確立が図られ、源流と中・下流との交流と連携が進みつつあります。その推進の中核にあるのが源流研究所です。狛江市は、多摩川の中流に位置し、水と歴史と文化に彩られた住宅都市です。多摩川に深く係わる矢野ゆたか狛江市市長と中村文明源流研究所長に「新春さわやか対談」と題して、多摩川の魅力や役割、可能性などを自由に語っていただきました。

小学校の頃、多摩川で泳ぐことが出来なかった

所長 明けましておめでとうございませう。今日は、お忙しい中「新春さわやか対談」に貴重な時間をお取りくださいます。矢野市長さんは世田谷区でお生まれになり、少年時代を大田区、狛江市の多摩川沿いで生活なさっておられますね。いわば多摩川の戦後の歴史の観察者の立場に立っておられます。多摩川と市長のお付き合いからお聞きしたいと思えます。

市長 明けましておめでとうございませう。源流研究所の会報「源流の四季」の「新春さわやか対

談」の機会に恵まれたことを大変喜んでおります。年頭にあたり日頃大変お世話になっている小菅村の方々をはじめ源流域の皆さん、流域の市民の皆さんに心から新春のおよろこびを申し上げます。

私は、昭和21年世田谷区に生まれ、すぐに羽田空港の少し上流に位置する鶴ノ木に転居しました。大田区は川崎市と共に多摩川の河口の町ですが、当時から多摩川で泳ぐことは禁じられていました。10歳の時狛江に移るようになりました。周囲から上流に行けば多摩川で泳げるぞーと聞かされていたので、多摩

川で思いっきり遊べることを楽しみにしていました。

所長 市長と同年代ですので、私は故郷・宮崎の大淀川で良く遊びました。少年の頃、夏はほとんど毎日川で泳いでいました。波しぶき荒い早瀬あり、川幅の広い大きな海あり、薄々と流れる本流ありと変化に富んだ川で友達と朝から晩まで遊んだことを今でも良く覚えております。魚取りがそれは楽しみで、大淀川で、かかし釣り（鮎子釣り）、鮎釣り、ウナギ籠、エビ籠、カニ籠、ハエ籠、一本釣りなどを兄弟や友達から教わりながら覚えてきました。嬉しかったのは、

捕った魚をもって帰ると、おふくろが喜んでくれて、その日のおかずを料理してくれたことです。

所長 多摩川の水質の汚染がすすんで川で泳げなくなったのが、市長の小学校時代だったんですね。都市河川の下流域では昭和30年代の初めから川と親しめなくなっただけですね。

市長 確かにその後、みるみる多摩川が変わるんです。まず、砂利の採掘で河川敷きがデコボコになり、多摩川の自然の景観が損なわれていきましたね。

日本の高度経済成長が始まる直前ですが、多摩川の中流部というのは、私鉄の沿線開発の中心地でしたから、工場の進出とか、宅地の造成が盛んで、当時はまだ公害規制の弱い時代でしたから、工場排水とか生活排水とかがドンドン多摩川に流れ込んでいました。水が汚れて水質が悪化し、悪臭が漂うようになり、採った魚がもう食べられなくなりました。

所長 水質が悪くなり、川が見えなくなったら終わりですね。

都心から観光客を呼んで 鮎料理を振る舞っていた

市長 しかし、戦後の一時期までは、多摩川の狛江付近は屈指の鮎釣り場でした。宿河原に松

坂仙蔵さんという方がおられました。話が聞くと鮎の季節は川の瀬に足を入れると鮎が足に



「新春さわやか対談」の矢野ゆたか狛江市長（写真右）と中村文明所長

「ぶつかるといって」とか「踏んづぶしてしまふ」ほど溢れていたそうです。そして、「鮎が群れると特有の臭いがした」とも言われています。鯛飼いやらわられて、多摩川沿いの玉翠園という料亭では観光客を都心から呼んで船遊びを楽しみ、鮎、コイ、ウナギなどの料理を振る舞っていたようです。

ね。鮎は流れの速いところを好みますが、鮎が浅重にも重なって迫り上がるようにして群れている光景が目に見えびますね。宮崎の大淀川でも同じような光景を見ましたね。若い頃、よく夜獲り（よどり）をやりました。カーバイトの明かりで寝込んでいる魚をとりに行くわけですが、鮎の稚魚が遡上する時期に、岸辺の入り江に明かりを向けると、

岸から2、3百の幅になって鮎子（あゆご・鮎の稚魚）がビシヨビシヨと跳ねて銀鱗を浮かび上がらせるんですね。それは見事というか、ウオー、ウオーと感動しましたね。毎年、市長 昭和40年代、50年代と鮎が全く取れない時期が続きましたね。それが多摩川の流れがきれいになって鮎が復活してくるんです。知人から聞いた話ですが昨年9月にNHKが特集番組を組み大きな反響を呼んだそうです。「大都会にアユ百万匹 多摩川奇跡の復活」というタイトルでした。番組では、一旦死の川に化した多摩川に鮎の大群が押し寄せる映像が鮮明に描かれていたそうです。

反響呼んだNHK特集番組 『多摩川奇跡の復活』

鮎子の大群に出会ってましたから、当時は全国の川で同じような光景が見られたんですね。多摩川の鮎は、一旦途絶えたのですか。

所長 その特集番組を見て胸にジーンとききました。途絶えた多摩川の鮎の復活を可能にしたの

画期的な「狛江古代カップ 多摩川いかだレース」の取り組み

所長 その多摩川での「狛江古代カップ多摩川いかだレース」は、すでに13回の実績を持つ画期的で素晴らしい取り組みですね。狛江市と小菅村との親密な関係もここから始まったと聞いています。

市長 狛江市制施行20周年記念事業の一つとしてこの事業が開始されましたが、何か市民みんなが参加できる、狛江市にふさわしい事業はないかと話し合うなかで「多摩川いかだレース」の提案が市民からありました。狛江市は資源の少ないところで、多摩川はその中で貴重な

は、意外にも東京湾の浄化だと番組で指摘していました。鮎は川と海を行き来する回遊魚ですので、川だけがきれいになっても復活できないわけで、海に鮎が暮らせる場所があったことが奇跡を生んだと。海と川の見事な連携が新しい生命を生み出したんですね。

市長 生命のつながりとダイナミックさには、頭が下がりますね。30年を超える歳月を必要としましたが、よくぞ復活したなと多摩川を褒めてやりたいですね。

資源であり自然の財産でもあります。その資源を市民がどう活かすかということだったと思います。

所長 市民の中に多摩川は狛江市の宝だという気持ちがあつくと育まれていたんですね。

市長 狛江市のシンボルは何かといえば多摩川です。昭和40年代、多摩川と狛江、多摩川と市民との関わりというのは、多摩川の自然を守るといふ視点から始まっています。開発に反対し自然を守る自然保護運動が盛んでした。平成2年（1990年）



矢野ゆたか 鉾江市長

第5回大会で鉾江と小菅の 運命的な出会いがあった

市長 第5回を記念大会と位置づけ、いかだレースの実施目的

の原点は何かと関係者で熱心に議論されました。多摩川流域を

にいかだレースが開始されますが、この前後から多摩川をどうまちづくりに活かしていくかという視点が変わってきました。当初いかだレースは一回限りのイベントでしたが、参加者からの強い要望で継続され、第3回大会の時、このレースの優勝チームの栄光を讃えるため、鉾

江市で古墳時代に出土した「和泉式土器」のレプリカを授与することになりました。このレースを「鉾江古代カップいかだレース」と呼ぶことになりました。市長 多摩川の流れに鉾江市の歴史や文化が見事に融合した姿ですね。

視野に入れて、「鉾江から多摩川を発信しよう」を合言葉に、多摩川源流の小菅村との運命的な出会いが待っていたんです。いかだレースの実行委員が小菅村を訪れていかだレースへの協力を申し入れた。小菅村が直ぐにこれに応じてくださった。その実行委員の方の言葉を借りれば、「打てば響くように応えてもらったこと」が小菅村との出発点になりました。その時小菅村に行っていたいかだの実行委員の方々が熱心な小菅村ファンになったと聞きました。

市長 小菅村も昭和62年に「多摩源流まつり」を開始し、上下流交流を進めていこうと意気込んでいた矢先に鉾江の皆さんがお見えになった。「有り難うございます。何とかしましょう。」と直ぐに小菅村がいかだレースに参加したと聞いています。

市長 第5回大会は、小菅との人的・物的な交流開始の歴史的な記念大会となりました。小菅の源流水を使い鉾江の酒蔵で醸

造された「鉾乃里」は友好の酒としてマスコミからも注目されましたし、何よりも小菅からの参加が多摩川といかだレースを大きくクローズアップする絶好の機会になりました。

市長 その後、流域交流の輪がいかだレースを核に着実に広がっていますね。

市長 第8回からは、多摩川流域のイベントをスタンプレリーで結ぶ「多摩川イベントラリー」を小菅村（多摩源流まつり）、丹波山村（夏まつり丹波）、調布市（やあやあフェスタ）、鉾江市（鉾江古代カップ多摩川いかだレース）の4団体で開始しました。その後奥多摩町（森林浴ヘルシーウォーク）も加わるなど流域間の交流が着実に広がっています。さらに、この分野では第10回を記念して「多摩川流域郷土芸能フェスティバル」も開始されるなど、地域交流を育む新しい事業がスタートしています。

「源流まつり」に参加して 小菅を見る目が変わった

市長 多摩川流域文化圏構築に向けての重要な取り組みですね。

今、川づくりに関わってとって大切なことは、流域の視点で

あり、上下流連携だと思っておりますが、鉾江のいかだレースが契機となって、重層的な地域間交流が確実に発展していますね。そのなかで、人と人の結びつき、絆が大きくなり、お互いの信頼関係が深まっていることは素晴らしいですね。ところで、矢野市長さん、小菅の「源流まつり」にどんな印象をお持ちですか。

市長 私は、市長になる前にも仲間たちと2度小菅村を訪れていますが、「源流まつり」に参加したのは、市長就任2年目でした。「源流まつり」に参加し



いかだレースに参加した小菅・多摩源流号



中村文明源流研究所長

源流体験と「森林再生」事業が 随分反響を広がっていますね

所長 昨年は、粕江水辺の楽校や岩戸児童センターの親子など

が源流体験教室に参加し、大変喜んでいただきました。

て小菅村を見る目が変わったというのが正直なところで、小菅村は単なる地方の村ではないなと感じました。先ず祭り自体が流域を大事にしている現れだし、地元山梨の人たち、都水道局、立川市長、山伏になった流域の方々など千人の村に一人を超越する人たちが集まってくる。凄

いと感じました。これにはカルチャーショックがありましたね。これを村でやっているんだ。村の人総出ですよね。村の人口の何倍もの人が寄ってきて祭りを楽しんでもらう。そのエネルギーが凄かったですね。まつりのペースになっていて考える方がしつかりしていると感心しました。

市長 源流体験教室の取り組みが注目され、反響が広がっていますね。粕江の水辺の楽校は、たまたま台風の直撃を受けて2回ほど源流へ行けなかったが、3度目の正直で源流体験の目的が果たせてみんな喜んでいました。子どもたちは、中流域の多摩川に日頃親しんでいるわけですが、その多摩川の大本である源流に行くと、いつもと違う多摩川を見た。川の源、水の源に直接触れた体験は心に残ります。記憶されますし貴重だと思います。体験した彼らが、小菅村と粕江市の次世代の交流の新しい手になりますね。

小菅村と源流研究所は、「森林再生プロジェクト」に取り組み成果を上げられています。流域のスギやヒノキの人工林を健全な森へ変えようという意欲的な取り組みは今後大いに注目したいですね。機会があれば私も小菅の深い森の中をゆつくりと歩いてみたいものです。

所長 今私たちは、「源流体験教室」と「森林再生プロジェクト」に力を注いでいます。いずれも未来への投資です。自然を愛する子供たちを育てたいし、源流域の素晴らしい自然環境をいつまでも保存したい。荒れていくスギやヒノキ林にはちゃん



多摩川を詠んだ万葉集の一首が紹介されている玉川碑（粕江市中和泉）

と手をかけて立派な森林に育てたいと考えています。過疎化や高齢化が進む中、山村や地主だけでは森林を守れなくなっています。森林は、空気を良くしたり水質を良くしたりと大切な役割

をもっています。この森の恩恵に流域全体で応えてみんなが森を守っていけるよう頑張りたいと思っています。

矢野市長さん、本日は忙しい中本当に有り難うございました。

源流の魅力と価値を全国に広めよう

小菅村と全国源流ネットワークは、12月13、14日、小菅村中央公民館で、第1回全国源流フォーラムを開催した。フォーラムには、島根、広島、岡山、奈良、神奈川、東京、埼玉、山梨の各県から120名が参加し、「源流の役割や価値と可能性の探求」をテーマに熱心に意見交換した。

第1回全国源流フォーラムを開催



第1回全国源流フォーラムであいさつする廣瀬小菅村長(2003年12月13日、小菅村中央公民館)

第1回全国源流フォーラムでは、主催者を代表して廣瀬文夫小菅村長が「全国の源流域は過疎化の荒波にさらされているが、過去の経済万能の反省にたつて人間性豊かな社会の構築に向けての台頭が起こり始めている。この2日間、源流の自然や歴史、文化などの価値と魅力、可能性を大いに探求してほしい」と挨拶して参加者を激励した。

源流の良さを多くの方が議論することは素晴らしい

続いて、来賓を代表して、環境省の佐藤寿延課長補佐が「全国すべての川に源流がある。源流の良さや価値をこんなに集まって議論することは素晴らしい。来年の全国源流シンポジウムでは、源流を多くの皆さんに知らせたい。国の方でもこの源流の

価値に対して取り組みをやるうと色々相談している。今日は源流の新しい価値を探って帰りたい」と挨拶した。この後、全国源流ネットワークの中村文明代表が、これまでの各地の源流での活動を紹介し、源流フォーラムの趣旨を説明した。

フォーラムでは、東京農業大学の宮林茂幸教授がコーディネーターを務め、高橋裕東大名管教授や哲学者の内山節さん、荒川ネットワークの恵小百合代表、京浜河川事務所の海野脩司所長が「源流の役割や価値と可能性の探求」をテーマにそれぞれの立場から意見発表した。

第2日目は、山道省三さんをコーディネーターに奈良、島根、岡山、埼玉、神奈川、小菅の各地から活動が紹介され、上下流連携や環境教育、源流の村の活性化策などが話し合われた。

源流フォーラムでの講師の意見発表(要旨)を紹介する。恵先生と海野所長の要旨は次号で紹介予定。



高橋 裕氏

源流を重んじることは、日本人の失いかけた自然観を取り戻すこと

戦後日本の復興が一段落した後、全国的な都市化現象が進んだ。都市に地方から大勢の人が集まり、都市で公害、交通渋滞、住宅不足、通勤ラッシュとか、その都市問題をどうするか政治の中心であった。逆に言うと農山村が軽視されたと言うこと。人口が減れば住民の声が政治に反映されなくなる。水源地は国の政策からも見放される傾向があった。川の上流が衰退すると川全体に影響する。そう言う認識がなかったのではないか。明治の頃までは、流域一体感があ

った。一つのキーワードとして、日本国民の大部分が自然を忘れてしまった。自然の価値とか、自然とはどういうものか分からなくなつた。それを復元するのが源流運動である。日本は、数字で表される経済効率一点張りやってきた。アジアの奇跡といわれるように大成功してきたが、自然とのつき合い方の本質を忘れたのではないか。日本人は、江戸から明治の初期頃まで、自然とのつき合いが非常に上手かった。自然とのつき合い方の術を知っていた。

源流を重んじると言うことは、自然を知ると言うことであり、自然とのつき合い方を知ると言うことであり、日本人が失いかけた自然観を取り戻すと言うことである。源流を忘れたことが、日本人の自然観をどう狂わせたか、それを取り戻すことがこれからの日本人にとって非常に大事である。

これまでの日本人の考え方を覆す新しい国民運動の原点として、源流問題を考えたい。日本人全体の自然観を叩き直さないと日本の将来は危ない。その一つのキッカケが源流の問題である。源流の価値を国民全体に分からせることができれば、その効果は絶大なものがある。

『多摩川源流自然再生協議会』設立へ

準備会には、小菅村、丹波山村、源流研究所、村議会、教育委員会、森林組合、養殖組合、NPO法人多摩川センター、NPO法人多摩川エコミュージアム、多摩川と語る会など地域住民、流域の市民団体、東京農大の専門家、山梨県、環境省、林野庁など地方公共団体、関係行政機関など25団体が参加した。

小菅村・源流研など25団体に準備会設置

源流にこだわった村づくりと深く関わっている

小菅村と源流研究所は「多摩川源流再生プロジェクト」に関する自然再生協議会の設置に向けて11月27日、小菅村中央公民館で準備会を設置した。準備会では宮林東京農業大学教授が座長に選出され、会議を運営した。



民間主導は全国で始めて

準備会では、小菅村の廣瀬文夫村長が「自然再生協議会設立準備会にあたりご多忙中お集まりいただき感謝します。この法律は、過去に損なわれた生態系その他の自然環境を取り戻すことを目的としている。小菅村が取り組んでいる源流にこだわった村づくりとも深く関わっている。ご協力をお願いする」と挨拶した。

続いて環境省自然環境局自然環境計画課の佐藤寿延課長補佐が自然再生推進法の内容と特徴について「この法律の目的は村長の言われたとおりである。河川・里山・里地・森林などの自然環境を保全し、再生し、創出し、維持管理する事業に取り組み、この法律は他の法律と多

少毛色が違う点がある。地域の多様な主体が自然再生に参加することや専門家による科学的な知見で実施するよう求めている。北海道の釧路や埼玉県で自然再生協議会が動き出しているが、民間主導の協議会は今回が全国で初めてである。」と説明し、参加者を激励した。

経過説明に立った源流研究所の中村文明所長は「昔の面影をなくした河川環境もみられる。人の手を加えない豊かな自然環境の保存とともに森林再生、源流文化再生、源流景観再生や多摩川流域文化圏再構築など総合的な視点に立った取り組みが重要で、今年度内に広範な人々の参加で協議会を設置したい」と提案し了承された。

準備会では、名称を「多摩川源流自然再生協議会」とすること、事務局を多摩川源流研究所に置くこと、協議会の公開と委員の公募をおこなうことなどを確認した。



内山 節氏

いま、歴史の源流とか、暮らしの源流とかいう大本を忘れていて、危なっかしい現実がある

源流に関して、文化的な視点から話をしたい。哲学といいますが、今から二千年前に、ギリシャの哲学者アリストテレスが、「なぜ、人々は哲学を必要としたのか」と問いかけて、我々はどこから来て、どこへ行こうとしているのかを知りたいからだと上手な回答をしている。

もう一つは、すべてのものを発生させた大本というのは何なのか。例えば自然は一体どこから発生してきたのか。あるいは、人間はどこから発生してきたのか。この問いかけは、重要で、物事の大本について、我々は今ほどしっかり考えなければならぬ時代はないだろう。半世紀

前ですと、かなり多くの人が農山村で暮らしを知っていた。農山村的な暮らしを知っていた。そうした暮らしが見える世界にいた。それが今日になってくると、自然が見えないだけでなく、私たちの社会観とか、世界観とか、原点がみえなくなっている。人間は、人間社会あるいは自然社会を含め、その大本が源流の世界だと思っています。その水の中から村が生まれ社会が生まれた。源流こそ、人間社会の源。

それは、歴史の源と重なってもいいかもしれない。我々の大本の社会は、さあっと保存しなければいけない。残していかなければならない。それは山が荒れってしまったら、森はどうなってしまうのかという問題だけでなく、記憶の中に残して継承していく作業をしていかないと、この後私たちの社会はかなり危なっかしいのではないかと。

源流を守る価値と言うものをあげると、私たちの社会が今、歴史の源流とか、暮らしの源流とかいう大本を忘れていっている危なっかしい現実がある。そういうものを残して、守って、そして交流しながら、再現させていく作業、むしろ言うところから、源流の価値というものがあつてはならないかという問題提起をしてみたい。

大きな反響を呼んだ

「森林再生プロジェクト」事業

今年度の「森林再生プロジェクト」は、地元の予想を超える大きな反響を呼び注目を浴びた。流域の緑のボランティアの間伐作業に取り組み献身的な姿は、地元や林業関係者に信頼と期待を広げていった。この「森林再生プロジェクト」の事業を振り返ると共に、「指導いただいた菅原先生の所感と参加者のアンケートを紹介する。

信頼広げる緑のボランティアの活動

10年かけた森づくりへの 第一歩を踏み出す

今年度の重点課題として取り組んだ「森林再生プロジェクト」事業が第1回の5月から第6回の12月まで233名の参加で大きな成果を残して無事終了した。源流域の人工林の森林再生に向けて、東京農業大学の専門家による森林診断白書作成とその処方箋に基づく森林整備を実施するとともに、小菅村・源流研究所・森林組合・東京農業大学が協調体制を確立し、流域の緑のボランティアと連携して間伐に取り組んだ実績は、将来への大きな財産といえよう。10年をかけた森林再生の第一歩を確実に踏み出したといえよう。

東京農業大学と森林 組合の指導と協力を得て

今回の「森林再生プロジェクト」は、東京農業大学と地元の森林組合の指導と協力を得ていることが大きな特色である。東京農業大学の宮林先生及び造林研究室の菅原先生から、「森林診断」の内容と進め方の指導を頂き、まず、人工林の現状調査が開始された。

調査項目は、樹種、樹齡、立木本数と立木密度、材積、上質、傾斜、現在の管理状況などであるが、村内の人工林を視察し、モデル地を設定して、円形標準地地による立木本数と立木密度の調査が実施された。こうした基礎的な調査を進め、所有者の

意向を踏まえて、森林の現状を診断し将来の森林の望ましい整備の方向を考案するやり方が採用された。

「森林診断」とその処方箋に基づき森林再生事業は、まだ開始されたばかりであるが、その実績を積み重ねることにより、この事業に対する理解と協力の輪が必ず広がっていくと確信する。

さらに、具体的な間伐作業に当たっては、地元の森林組合のインストラクターや林業家の指導で森林整備が実施された。インストラクターや林業家の丁寧で親切な指導に参加者から感謝の声が絶えなかった。

ボランティアの参加者は、 交通費と参加費を負担

今回の「森林再生プロジェクト」の緑のボランティアの募集に当たり、大きな不安要因を抱え込んだ。それは、ボランティアの参加に交通費と参加費の負担をお願いしたことである。例えば、新宿から奥多摩町まで交通費が往復で二千円かかる。そして二日間、スギやヒノキの間伐に懸命に取り組み汗をかいて、参加費を四千円支払っても、合計六千円の負担が参加の条件である。

当初、このハードルを越えて源流・緑のボランティア活動に参加してくれる流域の市民がどれくらいいるのか予測がつかなかった。

新聞報道に大きな反響 増える環境ボランティア

嬉しいことに朝日新聞が、5月8日付都民版で「山梨県小菅村・ボランティアを募集」多摩川の水源を守る」と森林再生事業の内容を紹介してくれた。新聞報道の当日からボランティアの申し込みが次から次へと舞い込み、6月末には、12月までの定員がほぼ埋まるという大きな反響があった。

源流・緑のボランティアへの参加者は、6回すべての森林再生事業に参加する学生や市民が生まれるなど、リピーターが多かった。森や村を良くするため献身的に活動するボランティアに地元の信頼が集まった。

今、地球環境への市民の関心は高い。よりよい環境を次世代に残していきたいと、自らも環境ボランティアに参加する動きが強まっているが、今年度の「森林再生プロジェクト」に取り組んで、間違いないに信頼できる良識ある市民が確実に増加していることを実感した。



第6回「森林再生プロジェクト」に参加された流域の市民の皆さん（12月7日）

参加者のアンケートを紹介

雨の日も風の日も健康で元気な森を育てるために、多摩川流域から源流・緑のボランティアに参加していただいた参加者の皆さん、本当にご苦労様でした。特に学生諸君の積極的な参加は、日本の将来に対する希望と確信を与えてくれました。「森林再生プロジェクト」参加者のアンケートを紹介します。

達成感を感じた

●今年最後のプロジェクトという事で、今まで何度か顔を合せていた方も暫く会えなくなるという寂しい気持ちもあり

ますが、1年間全部ではありませんが、参加してきた達成感も感じています。暗い森林に日の差す光景を忘れないと思います。この事業に参加するためにバイトして来ています。しかし、4千円プラス交通費を出しても来る価値は大いにあると思います。

平成15年度森林再生事業の施策指針

東京農業大学 菅原 泉

今年度の調査地は、村内5箇所を設定したが、実際に間伐を行なったところは4箇所であった。対象地は、造林木にとって比較的肥沃な土地条件にあり、かつ間伐手遅れ林分なため、特にスギ林は胸高直径に対する樹高の割合が高く、ひよる長い傾向があった。

資源となるように間伐を行うことになったが、実施指針の密度管理図から導き出した間伐率をそのまま適用しては、雪害の危険性が高いため、間伐率は低めに設定した。しかし、数年後には、対象地を何回か見直しながら、理想の成立本数に近づけたことを考えている。

今後、適地適木の研究を進め、雪害や風害に耐える林木に仕立てると共に、間伐を通して林床に光を入れて、林床植生を育成・維持し健全な生態系の回復・循環を図りたい。

この村が大好きです

●小菅村にお世話になり始めて7ヶ月。本当にこの村が大好きです。ボランティアに参加しながら山の様子などを見て、間伐が終わったあとに上を見上げると大きく空が見えるようになったりしていて、人海戦術の力を思い知りました。木に登る望月さんも素敵で、皆さんとお酒を飲んで話したり、本当に楽しく過ごせました。チェーンソーを使ってみたいです。

間伐後の変化出したい

●宿は一つ（もしくは近く）のほうが良いです。手作り味噌汁もあつた方が絶対良いです。間伐前後の変化の具体的数値（照度など）を出したいです。もっともっと多くの指導者のもとでやつた方がよいのでは？知識、経験のある人は、自分勝手にやっていることもあるので。

とてもやり甲斐を感じた

●今回は間伐の選定を自分でやり、それを選んだ理由や伐倒方



森林組合のインストラクターの実技指導（12月6日）

向を指導者の方に説明するという形だったので、とてもやり甲斐を感じ、深く理解することが出来ました。10年後が楽しみで

意外にも飽きなかった

●ひたすら間伐という、このプロジェクトに参加しましたが、組合の方も楽しくて意外にも飽きずにやってきました。何より、自分が何かしたい、村をもっと良くしたいという、一人一

人の強い気持ちが清々しく集結していたのが素晴らしいです。いろんな人と垣根なく知り合いになれば、木のこと森のこと、人のことを学べました。有り難うございました。夜の時間、完全に解放！のときを決めて欲しいです。

感謝感謝の気持ちです

●ボランティア活動は、種を蒔く人、水をやる人、その花を愛でる人、それぞれに役割があるもの。世代を越えた人々が、この小菅の大自然を愛する心に触れ、思い出多き楽しい日々を過ごすことが出来て、感謝感謝の気持ちで一杯です。小菅村役場の森林再生プロジェクト事業に乾杯！有り難うございました。

ぜひ来年も参加したい

●今回で5回目となります。5回もこの素晴らしいボランティアに参加させていただき誠に有り難うございます。今回も様々な年代との交流や森林組合の方との交流と良い経験をさせてもらいました。ぜひ来年も参加したいと思います。有り難うございました。今日は、間伐の意義を再確認する場を設けたことは良いことだと思いました。

紅葉の水源地と味見を満喫

今秋は研究所主催事業として、毎年恒例「紅葉・水干探訪の旅」と「紅葉・大菩薩探訪の旅」、そして初めての試みとして生活文化を体験してもらう「干柿体験ツアー」の三企画を行いました。どの企画も天候に恵まれ、楽しい企画となりました。



初企画「源流・干柿体験ツアー」

景観と食文化の継承へ

今回初めて、干柿作りを体験してもらったツアーを企画しました。源流地域の多くが高齢化が進んでしまい、柿の実がなくても、大きな柿の木からの柿の実をもぎ採るのは大変な労働で、ただ落ちていくのを

見ているだけという家庭も多くなつてきています。山村の風景として、民家の側に柿の木がたっているのは、とても風情があります。そして、源流部ならではの気候がおいしい干柿をつくり出すのです。この景観の維持と風土から生まれた食文化の継承、多摩川の流域交流を目的に「源流・干柿体験ツアー」が開かれました。



竹竿をのびして柿とりに熱中する参加者（11月22日）

11月22・23日の当日は、26名の参加者でした。普段、山登りのツアーに参加している人や、逆に「山登りはできないけれど、干柿作りならできるかも」という人、そして「柿が大好きです」という人達が集まり、とても賑やかに楽しく行われました。

みんな夢中で柿を採る

一日目は午後から柿採りをしました。先がY字になっている竹竿で柿の実がついている枝を扶んで折ってとるのですが、落とさずうまく採るのはなかなか大変です。けれど、途中で、すでに熟している柿を食べべたり、休憩もしながら、「楽しい、楽しい」と、みんな夢中で柿を採っていました。結局、小菅村内三箇所の柿の木から千個を超える柿を採りました。次の作業は選別です。採る際に落として、割れてしまったものや傷がついたものを選り分けしました。作業をしている時に、通りかかった村民の方から「柿の緑色のへたは、採った当日に取ってしまった方が取りやすいよ」と教えてもらい、へた取りの作業も急遽行い、一日目の作業を終えました。

二日目は、小菅村内の原始村で、柿の皮むきをしました。山積みした柿を目の前にみんな、眺めているかのように一生懸命むいていました。皮むきを終えて、一本の紐に二十個くらいずつ結びつけ、中央公民館の

軒先に干しました。

干柿づくりには、適度な日照と空の風が必要ですが、柿を吊るした後に雨や曇りの日が続いたため湿度が高くなってしまい、柿がカビてしまうのではないかと心配しました。ところが、12月上旬から好天と冷え込みが続き、また、外敵から柿を守るための努力の甲斐あって順調に仕上げることができました。地元の方々からも「なかなかの出来栄え」とお褒めをいただきました。

「紅葉・水干探訪の旅」

10月25・26日実施

初めての参加者が多くいらしたために、一日目は小菅村内の長作観音堂、御鷹神社、白糸の滝、雄滝の見学をしました。紅葉の時期は、新緑とは違った雰囲気味が味わえました。

二日目はとにかく天気がよく、雲がひとつもない青空でした。笠取山の頂上からパノラマがすっきりと見える日はかなり少ないのですが、見事に美しい青空と山々の稜線が見えたのでした。

この日は参加者全員が笠取山頂に挑戦した程ですが、季節柄もあって、水干の最初の一滴に出会えなかったのが、少し残念でした。



快晴の天狗の頭で記念写真（11月3日）

「紅葉・大菩薩探訪の旅」

11月2・3日実施

一日目には、秋澤先生のご指導のもと、陶芸教室を行いました。コーヒーカーップと、葉っぱの形の小皿を作りました。釉薬がけと焼きは先生におまかせです。出来上がった作品は自宅に発送しましたが、みなさん旅の記念になったことと思います。

二日目の大菩薩登山は、長兵衛小屋から登り、大菩薩峠から石丸峠を経て牛の寝を通り、小菅・雄滝上流に下りてくるという行程にしました。この日は、天気が良く暑いくらいでしたが、雪をまとった富士山や南アルプスを数箇所で見ることができ、歓声が上がっていました。

竜喰谷との感動的な出会い



国土交通省京浜河川事務所
調査係長
石田 和也

平成15年9月25日、竜喰谷を多摩川源流研究所の中村文明所長と小菅村の源流交流推進室の佐藤英敏室長そして、京浜河川事務所の石田ら4人で実踏調査した。聞けば、中村所長が源流の虜になったのもこの竜喰谷での体験が始まりらしい。

期待は不安で押しつぶされ

ウエットスーツや溪流用のシ



清流をたたえる竜喰谷

ユーズなどの装備は、川崎市に在住する方からお借りすることが出来た。その方からフックスなどで注意事項などアドバイス頂くと同時に調査の前日に「私も行きたかった。本当に悔しい」と話していたのをふと思いついた。中村所長や装備をお借りした方を魅了する源流で、どんな感動が待ち受けているのか期待は高まっていた。

しかしながら、準備は思いのほか大変だった。ウエットスーツはややウエイトオーバーの身体を簡単には武装させてもらえず、柔軟性に欠ける身体は溪流シューズを履くことさえ住生させた。「こんなことで大丈夫か？」

期待感、緊張と不安で押しつぶされそうだった。

「なんと尊い」とつぶやく

いよいよ源流。竜喰谷に到着した。前日からの雨で谷を流れる水はやや多めとのこと。「初めに少し大変なところがあります。」中村所長からあらかじめ注意があったが、水量の増した一ノ瀬川の渡渉への挑戦であったが、想像以上に迫力を感じた。足の裏までしつかり川底を掴むようにして本流を横断した。

しばらくすると滝に出会った。竜喰谷の滝だ。この水が東京湾まで行くのか」と頭ではわかっていても、やはり体験すると実感として身体に入ってくる。上手に表現できないが、「なんと尊い」と心の中で呟く。

「なんと尊い」と心の中で呟く。

自然からの褒美

そう思ってしまった瞬間に緊張していたことを忘れてしまった。精錬場の滝、ヤソウ小屋の滝、下駄小屋の滝と次々に出会う。溪流の女王であるヤマメも確認した。キノコも拝借した。紅葉の走りを感じさせる木々はまた葉を残し、雨にもかかわら

ず殆ど雨を頭に落とさない。360度どこを見ても自然、どこを見ても感動してしまう。滝一つとっても、全く表情が違う。男性的なもの、女性的なもの、神秘的なもの、いろんな表現があると思うが、表現するだけで陳腐になってしまうようだ。自然とはこういうものなのか。

また、調査の過程で、体力的に厳しい場面もあったが、その後には決まって素晴らしい景観や生き物に出会うことが出来た。自然からの褒美なのかもしれない。

仕事で多摩川に係わることをしている。環境学習で川を利用してくださるといふような方面で訴えてきた。環境学習の目的の一つは、子ども達の自然体験をとおして、情操を育もうとするものだが、源流や川の自然に対

峙すれば、確実に子ども達の情操を刺激できる。「今まで言ってきたことは間違っていない」と本当に実感できた。

そして、もう一つ確認した。源流に中村所長や佐藤室長のようにはすばらしい方がいるのは、私が2年半前、多摩川に係わるようになってすぐに知った。調査に同行頂きいろいろ話を聞かせて頂いたが、改めてその情熱を肌で感じ、「すごい人が源流にはいるんだ」と実感することができた。

最後に中村所長、佐藤室長本当に有り難うございました。源流のすばらしい自然にもう少し余裕を持って、そして楽しく接してもらえよう。トレーニングして、仲間を誘ってまた行きたいと思えます。

謹賀新年

昨年中はなにかとお世話になりました

ありがとうございました

今年もどうぞよろしく

お願い申し上げます

平成十六年元旦



多摩川源流研究所

中村文明

井村礼恵

小菅村源流交流推進室

佐藤英敏

奥秋一俊

船木 稔

参加者募集！平成16年度イベント紹介

ご好評をいただいております「大菩薩・探訪の旅」「源流・水干探訪の旅」「源流古道・水源林体験の旅」、そして親子対象の「源流体験教室」を16年度も開催いたします。これらの事業は源流と流域交流を推進し、源流一帯の豊かな水源林や渓谷を多くの方に体感していただくことを目的としています。

新緑の「源流・大菩薩探訪の旅」

源流・大菩薩探訪の旅は、小菅側から大菩薩峠に向かい、南大菩薩を歩く旅です。ブナ、ミズナラの巨樹や学術的にも貴重なシオジ林にも出会うことができます。峠からは南アルプスや富士山も絶景です。コースは小菅村の日向沢登山口から登り、大菩薩峠→熊沢山→石丸峠→天狗の頭→牛ノ荘→雄流上流へと下る7時間ほどの行程です。

- 日時／5月29日(土)～30日(日)
- 集合／JR奥多摩駅午前10時
- 費用／一万三千元(宿泊費・泊四食付き・保険代・温泉代・その他)
- 対象／山歩きに自信がある方
- 定員／30名(先着順)

新緑の「源流・水干探訪の旅」

多摩川は、塩山市の笠取山にある水干から百二十八キロ流して東京湾に注ぎます。あなたの目で多摩川の最初の一滴を確かめてみませんか。山梨県百名山にも指定されている笠取山の頂上からみる景色も絶景です。

コースは、歩きやすい整備された登山道で、往復6時間の行程です。今年初めて土・日コースと平日コースを設けました。

- 土・日コース
- 日時／6月5日(土)～6日(日)
- 集合／JR奥多摩駅午前10時
- 費用／一万三千元(宿泊費・泊四食付き・保険代・温泉代・その他)
- 対象／山歩きに自信がある方
- 定員／30名(先着順)

- 平日コース
- 日時／6月9日(水)～10日(木)
- 定員／20名

「源流古道・水源林体験の旅」

昨年は台風のため、残念ながら中止になりましたが、今年もBコースに挑戦します。かなりの距離を歩きますので、参加希望者は日頃から足腰を鍛えておいて下さい。Bコースは、柳沢峠→笠取山→持監峠を歩きます。

- 日時／8月6日(金)～8日(日)
- 集合／JR奥多摩駅午後3時
- 費用／一万八千元(宿泊費・泊六食付き・保険代・その他)
- 対象／山歩きに自信がある方
- 定員／30名(継続参加者で定員はほぼ満ちています。新規募集は若干名のみ。先着順。)

「源流体験教室」

研究所設立以来、大変好評をいただいております親子対象「源流体験教室」



自分の力を信じて源流を渡る川崎水辺の栗校の子どもたち(2003年7月)

も、平成16年度の受付を始めております。渓谷の岩盤の雄大さ、そして水のきれいなと冷たさ。淵に飛び込んだり、滑ったり、ヤマメなどの生物観察をしたりと、ありのままの源流を子ども達に体感して欲しいと考えています。

また、ゆつたりと多くの源流を体験できるよう、宿泊型をお勧めしています。キャンプ場をはじめ、各種宿泊施設もあり、お問い合わせ・お申し込みは

- 期間／6月から9月まで
- 体験場所／多摩川源流・小菅川渓谷 内体験ゾーン

お問い合わせ・お申し込みは

- 小菅村役場(源流交流推進室)
- ☎0428-8710111
- 多摩川源流研究所
- ☎0428-8717066



人気の源流古道の旅(2001年8月)